

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

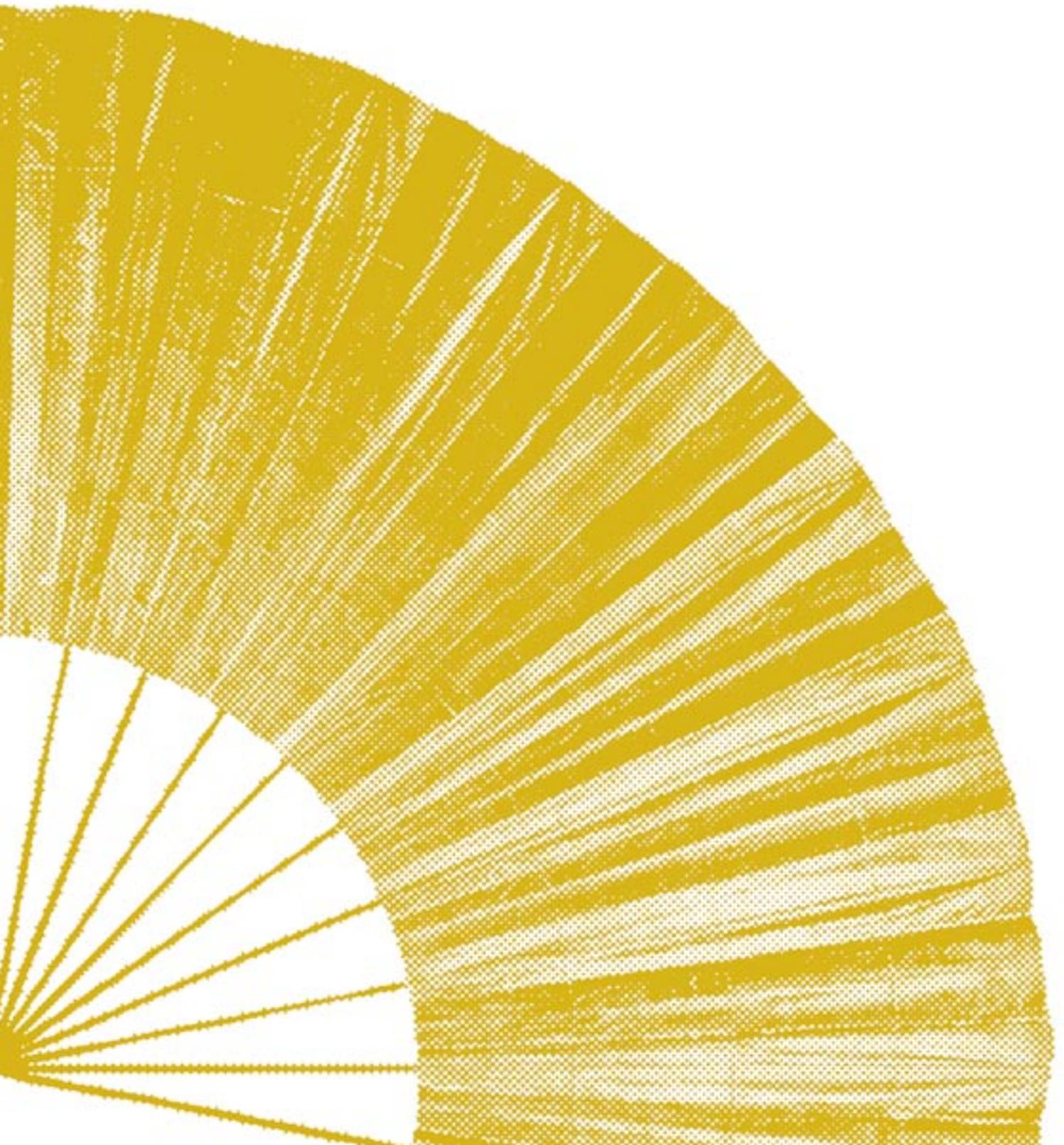
URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

82

秋の企画展

徳川将軍家と
会津松平家

福島県立博物館



秋の企画展

福島県立博物館・若松城天守閣共同企画展
福島県立博物館開館二〇周年記念

徳川将軍家と会津松平家

会期 9月30日(土)～11月5日(日)

○開館二〇周年、若松城天守閣との初の共同開催

県立博物館は、多くの方々に支えられながら、この秋に開館二〇周年を迎えることになりました。これを記念する企画展は「徳川将軍家と会津松平家」をメインテーマに、若松城天守閣との初めての共同開催という形で行います。

若松城公園内に隣接する博物館と天守閣の二会場で同時に開催し、それぞれの会場でサブテーマを設けていきます。博物館会場は、「葵の絆」がテーマで、徳川家康・保科正之をはじめとする人物を、関連資料によって紹介しながら、両家のむすびつきを、時代を追ってたどります。天守閣会場は、「激動の幕末」をテーマに、幕末の政局や時代状況、徳川家茂・慶喜や松平容保の動向を紹介してゆきます。

○徳川記念財団の特別協力

今回の企画展の大きな見所は、徳川宗家(将軍家)に伝来した歴史資料・美術作品が数多く出品される点にあります。御所蔵者である財団法人徳川記念財団の格別の御協力をいただいて実現した企画展といっても過言ではありません。歴代将軍の姿を描いた肖像画や自筆の書画、夫人たちの身の回りを飾った品々などを御覧いただけます。また幕末の政治史を語る重要資料である徳川宗家文書の中から、初公開となるものを含めて展示します。



(右) 太刀 銘 来国光 家康所用
(徳川記念財団蔵)
(左上) 蒔絵箱入守袋 家光所持
(日光山輪王寺蔵)
(左下) 保科正之筆 河骨鶴鶴図
(徳川記念財団蔵)

○徳川将軍家と会津松平家

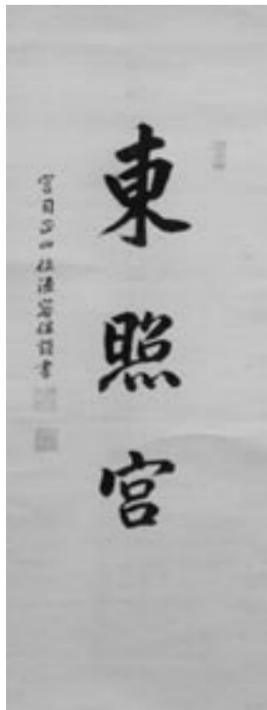
会津藩については、戊辰戦争における悲劇のことが広く知られていますが、幕末にいたるまでの歴史は、もっと様々な視点から見直すことができるのではないのでしょうか。今回の展示では、幕府や将軍家との関わりという点に神経を集中させて、ぜひ展示を御覧ください。松平容保が、一四代将軍家茂の命を受けて京都守護職という役職について活躍したこと。幕府による全国的な海防政策の中で、会津藩兵が蝦夷地警備や江戸湾警備などを勤めたこと。さかのぼって会津松平家の祖である保科正之が、三代将軍家光の異母弟であり、四代将軍家綱を補佐し幕政に重きをなしたこと。正之を先例として、将軍後継者の元服の際には会津松平家が理髪の役を勤める家柄とされたこと等々。会津藩の歴史が、もっと広がりをもつて見えてくるにちがいません。

(歴史担当 高橋 充)

展示構成

- プロローグ 江戸幕府の成立 初代将軍徳川家康
- 第一章 泰平の世 秀忠・家光・家綱と保科正之
- 第二章 歴代将軍のすがた 綱吉から慶喜まで
- 第三章 ふたりの御台所 天璋院と和宮
- 第四章 会津藩と歴代藩主 正経から容保まで
- 第五章 激動の幕末
- エピローグ その後の徳川宗家と会津松平家

(右) 松平容保筆 東照宮神号
(日光東照宮蔵)
(左) 錦手獅子香炉 天璋院所用
(徳川記念財団蔵)



関連行事

○記念講演会

「天下泰平の終焉
— 悲劇の会津松平家と徳川将軍家 —」
講師 徳川記念財団理事長 徳川恒孝さん

日時 一〇月一日(日) 午後一時半
会場 講堂

「戊辰戦争前後の会津」

講師 中央大学教授 松尾正人さん
日時 一〇月八日(日) 午後一時半
会場 講堂

○展示解説会

日時 九月三〇日(土) 午前一〇時
一〇月四日(土) 午後一時半
一〇月五日(日) 午後一時半

※記念講演会は、当日10:30より博物館受付で入場整理券を配布します。

■秋の企画展「徳川将軍家と会津松平家」は、平成一八年九月三〇日(土)から二月五日(日)まで開催しています。
■観覧料 一般・大学生六〇〇円(四八〇円) / 高校生三五〇円(二八〇円) / 小・中学生二〇〇円(一八〇円) () は二〇名以上の団体の場合の料金です。

企画展

「布の声をきく」

関連事業

◎記念講演会

平成一八年七月二十九日(土)

「北の衣の文化」

講師 青森中央学院大学講師 田中忠三郎さん

田中さんはこんな方です

田中忠三郎さんは青森市在住の民俗研究者です。その田中さんの膨大なコレクションより、今回の展覧会では多くの印象的な資料をお借りして展示しています。展示室に入ってから最初にごらんいただくようになってるのが津軽地方のドンジャ(夜着)です。何層にも継ぎあてられた布。その中には麻の綿が入っています。ずっしりと重い夜着。麻布のほか、木綿布も使われた補修の後。そのぼろぼろの外見こそが、今回の展覧会を象徴するものだ、そう判



断して最初に見ていたかどうかとしたのです。こうした「ボロ」をいち早く集め、今日の私たちに伝えてくださっている田中さんは、衣生活の研究者として有名です。津軽コギンに南部菱刺。こうした北の衣の文化を資料として数多く収集し、そのコレクションの一部は重要有形民俗文化財に指定されています。

体験と生活から語る

講演が始まる前、田中さんと打合せしていたとき、「今回の展覧会の図録に立派な仕事着の論文が掲載されている。話はあれに尽くされている。」とおっしゃっていました。それは主催者である私たちへの礼儀としての言葉だと思っていました。しかし、講演会が始まって、話が進むにつれて、田中さんは「学問」としてではなく、まして「理論」としてでもなく、「生活」の事実としての話を、布の豊かなエピソードとして語りはじめるのです。つまり、実感のともなう生活としての「布」が今回の田中さんの語りたこと、語るべきこととしてあったのだと思います。たとえば、モンペなどの下衣。若いうちは、膝をついてのふき掃除などもあって、膝が傷む。年寄は草取りをするとき、腰を下ろしながらする。だからお尻が汚れ、傷む。一着のモンペから、そうだ、これはおばあちゃんがはいっていたのだ、と推測できる。こういう、実に生活の実感に基づいた話が田中さんらしさなのです。

その姿勢を示すものが段ボール箱一杯の資料です。これは講演のためだけにあらかじめ青森から送ってきたもので、講堂の演台の横の机の上に並べられました。実際に手にとって欲しい、触って欲しい、そういうことが、言葉だけにとどまらずに、田中さんの行動となって現実化するのです。

自由闊達に

すでに、田中さんの話は自由の境地に達しています。きつと頭脳だけではなく体全体に染み込んだ数多くの事例が、田中さんの喉を震わせ口から音声となつて出てくるのでしよう。だから、話は生い立ちから始まるのです。生活に染み込んだ話は、体に染み込んだ順序を追って話すことによって実際の力となるのです。考古学に目覚めたとき。そこから、今度は布への関心。布というものが深く生活の中に根ざしていること。そして、地域的な相違への気付き。夢中で集めること。百台を優に越える地機。こうしたもの、実物の資料への執着。汚れたボロを集めること。

田中さんの体の中に刻印された多様な経験がこうしてこの講演で具体的に示されたのでした。

普通のタイプの研究者にはない、深い感銘を聴講した人々にもたらしたのです。その意味でも、今回の展覧会にふさわしいお話でした。

(民俗担当 榎陽介)



Q..最近フタバズキリュウに新しい名前がついたと聞きましたが、どういうことですか？

A..フタバズキリュウは、化石をよく知らない人でも、一度はその名を耳にしたことがあるたいへん有名な化石ですね。この動物はハ虫類に属し、中生代ジュラ紀から白亜紀にかけて、世界中の海に生きているクビナガリュウの仲間です。体の前後にあるヒレを使ってたくみに泳ぎ、長い首を動かして海中の動物を食べて生活していました。

フタバズキリュウは、昭和四三年に、いわき市大久町の大久川で、当時高校二年生であった鈴木直さんによって発見されました。これをきっかけに、国

フタバズキリュウに

名前がついた？



フタバズキリュウ頭骨(複製)
福島県立博物館蔵

立科学博物館によって本格的な発掘が行われ、五〇〇個ほどのあるクビナガリュウの骨のうち半分近い骨が見つかりました。首の部分は川の浸食によって失われていましたが、幸い、頭骨・胸骨・四肢骨・骨盤など重要な部分が見つかり、それをもとに全身の骨格が復元

されました。

フタバズキリュウが発見された地層は、白亜紀後期の、今から約八五〇〇万年前の双葉層群玉山層です。このことと、発見者の鈴木直さんの名前をとり、「フタバズキリュウ」と名づけられました。でもこの名前は「和名」といって、日本でだけ通用する名前です。国際的に認められた正式な名前は「学名」です。例えば、われわれ人類は「ヒト」ですが、正式な学名は「ホモ・サピエンス」です。これは、人類がホモ属のサピエンス種であることを意味します。フタバズキリュウは、今まで学名が付けられていませんでした。太平洋地域から発見された白亜紀のクビナガリュウ化石は、保存の良い標本が少な

Q&A

回答者
自然担当
竹谷陽二郎

く、分類研究もそれほど進んでいません。そのため、フタバズキリュウが他のクビナガリュウと同じ種類かどうか、比較が難しかったのが主な理由です。

このたび新たな研究で、フタバズキリュウはクビナガリュウのエラスモサウルス科に属することが明らかになりました。さらに、太平洋地域で発見された十数種類のエラスモサウルス科の標本と比べて、目と鼻の間が広い、鎖骨の形状が違う、比較的長い上腕骨をもつことなどの特徴から、新属・新種と判断されました。クビナガリュウの進化や発展を解明する上でたいへん大きな成果です。研究したのは、国立科学博物館の佐藤たまき特別研究員・真鍋真主任研究官、そして発掘以来研究を続けられた群馬県

立自然史博物館の長谷川善和館長の研究チームです。イギリスの古生物学会誌に論文が掲載され、「フタバサウルス・スズキイ」という名が正式に認められました。フタバズキリュウの名が学名に残っているのがうれしいですね。

福島県立博物館の自然部門展示室には、フタバズキリュウの全身骨格(複製)が展示してあります。正式な学名がついた姿をあらためて眺めてみると、気のせいかひとまわり大きく立派に見えます。



フタバズキリュウ全身骨格復元模型
福島県立博物館蔵(原標本は国立科学博物館蔵)

皇女和宮の書状と家茂の返翰

阿部綾子 歴史担当

当館と若松城天守閣との初の共同企画展「徳川將軍家と会津松平家」(平成一八年九月三〇日〜一月五日)において、仁孝天皇の皇女和宮(一八四六〜七七)の自筆書状が二通、出品されます。幕末の動乱の中、公武合体推進のために一四代將軍家茂(一八四六〜六六)に嫁いだ和宮。政略的な側面が強調されることの多いこの結婚は、あまりにも有名です。二人の婚儀は、文久二年(一八六二)二月、江戸城で挙行されました。偶然にも弘化三年(一八四六)閏五月に生まれた二人は、この時一七歳でした(数え年、以下同)。

家茂は婚儀の翌年三月、公武合体の実現をめざして、三代將軍家光以来となる將軍上洛を果たしています。家茂の上洛は三度に及び、慶応二年(一八六六)七月に二一歳という若さで亡くなったのも大坂城中でした。そのため、婚儀後の家茂は江戸城に不在である期間が長く、夫婦で一緒に過ごすことのできた時間はあまり多くありませんでした。そんな中、滞京中の夫家茂に対して書き送ったのが今回出品される和宮の書状(①文久四年(一八六四)二月二〇日に元治と改元) 二月九日付、②元治元年四月五日付)です。

ところで、この二通の書状の間にちょうど当てるまる家茂の返翰(①元治元年二月付)も、今回揃って出品されます。家茂の返翰は残念ながら写しですが、三通の書状を読みくらべると、二人がどんなやりとりを交わっていたのかが良く分かります。



静寛院宮(和宮)肖像写真 徳川記念財団蔵

※三通の書状は、会期中、当館と若松城天守閣の両会場に出品します。

(橋本実麗、一八〇九〜八二)を招いて「ゆるゆるの対話」したこと、その際色々噂話ができうれしかった(「天之外之喜悦」ことを和宮に伝えています。和宮は母・観行院(橋本経子、一八二六〜六五)の実家である橋本家で養育されたため、話題の中心は和宮のことだったかも知れません。家茂もまた、伯父が「元氣壯健」でいることを和宮に知らせ、和宮を氣遣っていたのです。



和宮(親子内親王)書状 徳川家茂宛 徳川記念財団蔵

それぞれの書状の主旨は、①家茂の無事の着京・右大臣昇進に対する祝詞および家茂の政務成功祈念、②右大臣昇進に対する祝詞への礼および従一位宣下の報告、③政務成功祈念および種々の品をもらったことに対する礼、となっております。そしてまた、書状の内容を詳細に見てゆくと、二人がお互いを思いやる行動をしていることが節々に読み取れます。例えば家茂は、参内の折に孝明天皇(一八三二〜六六)手ずから賜った御酒を特に願って頂戴し、はるばる和宮の元に届けていました。久々に兄弟の御酒を味わった和宮は、「遠方ながら御風味もかほり不申」と喜んでいきます。対して和宮は、江戸城に住む家茂の生母実成院(徳川斉順側室)に「日々面会」するなど細やかな気配りを見せ、兄弟の「御酒」をも分け与え、その次第を家茂に知らせて心労多い夫君を安心させようとしています。また、家茂は、上洛後に和宮の伯父・橋本中納言

トピックス

移動展「馬と人の年代記inまほろん」大陸からくまへトピックス開催前の四日間

九月一八日(祝)まで、白河市のまほろん(福島県文化財センター白河館)を会場に、移動展を開催いたしました。ここでは、開催前の四日間、苦勞の準備期間のドキュメントをご紹介します。

八月一日(火)

朝、博物館にて展示品や解説パネル、展示用具などを車に積み込み、いざ、まほろんへ。午後、まずは積み荷を降ろし、レイアウトした図面を見ながら展示ケースを置いていきます(写真1)。これが難しい!



写真1 ケースを所定の位置に配置します。

八月三日(木)

午前中、ようやく展示品を並べ終えました。モノを壊さずにできたことで一安心。午後、最後の仕上げはライティングです。展示品を効果的にみせるには、欠かせない作業です(写真3)。



写真3 ライティング、光を操り、美しく。

写真4 無事開幕。ありがとうございました。

八月四日(金)

展示室の前に、体験コーナーとはわ馬を設置しました。そして、完成! 午後には報道機関向け内覧会を開催しました。

八月五日(土)

いよいよ開幕。たくさんの人にご来場いただきました、ありがとうございます(写真4)。



写真2 展示品を並べます。慎重に…。



(考古担当 横須賀倫達)

冬の特選資料展予告

奥会津の職人巻物

福島県南会津郡只見町周辺では、職人の由来やその祖神の由来・祭の方法などを記述した巻物を所持し、さまざまな生業が営まれてきました。屋根葺・番匠(大工)・木地挽・元山(伐採)などのほか、伯楽(馬医)や産婆の巻物など特殊な生業のものもあります。これらの巻物は、桐の箱に入れられ、神棚や蔵などに大切に保管されてきました。只見町では、現在でも、番匠が上棟式に巻物を掲げ祈禱を行っており、巻物を所持することが一人前の職人であるという、巻物の民俗が今日まで生きています。



伯楽(馬の医)の巻物 個人蔵

この展覧会は、神奈川大学日本常民文化研究所との共同開催です。奥会津地方の職人の気質と民俗について、最新の研究成果から展示します。(民俗担当 佐々木長生)

■冬の特選資料展(奥会津の職人巻物)は、平成一九年一月二〇日(土)から二月二五日(日)まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「くらしの器―練鉢から大皿まで」

会期 一月二二日(火)～一月二二日(日)

講演・講座

※は要申込

◎企画展関連行事

◎記念講演会

「天下泰平の終焉」

―悲劇の会津松平家と徳川将軍家―

講師 徳川記念財団理事長 徳川恒孝さん

日時 一月一日(日)午後一時半～三時

◎記念講演会

「戊辰戦争前後の会津」

講師 中央大学教授 松尾正人さん

日時 一月八日(日)午後一時半～三時

◎展示解説会

講師 徳川記念財団学芸員 柳田直美さん

日時 九月三〇日(土)午前一時～三時

講師 当館学芸員

日時 一月四日(土)午後一時半～二時半

日時 一月五日(日)午後一時半～二時半

◎考古学講座

※「縄文土器の野焼き」

講師 学芸員 森 幸彦 高橋 満

日時 一月一日(日)午前一時～午後三時

※「勾玉をつくる」

講師 学芸員 藤原妃敏

日時 一月二日(日)午後一時半～三時

◎保存科学講座

※「見えない光で資料を調べる―赤外線写真・X線写真を用いた資料調査の実例―」

講師 学芸員 松田隆嗣

日時 一月七日(土)午後一時半～三時半

◎歴史講座

※「史跡探訪―若松城を歩く―」

講師 学芸員 高橋 充 木田 浩ほか
日時 一月四日(土)午後一時半～三時半

◎美術講座

「近くで楽しむ博物館収蔵品ガイド5」

―軍記物語絵と甲冑―

講師 学芸員 川延安直 小林めぐみ

日時 一月二〇日(金)午後一時半～三時

「近くで楽しむ博物館収蔵品ガイド6」

―飲中八仙図と酒器―

講師 学芸員 川延安直 小林めぐみ

日時 一月二七日(金)午後一時半～三時

※「うるしの技に挑戦―金継ぎ―」

講師 会津工芸新生会副会長 大塚栄一さん

日時 一月九日(日)午後一時半～三時

※「うるしの技に挑戦―金継ぎ2―」

講師 会津工芸新生会副会長 大塚栄一さん

日時 一月二六日(日)午後一時半～三時

※「会津型紙でカレンダー作り1」

講師 喜多方染織グループれんが代表

日時 一月二二日(土)午後一時半～三時

※「会津型紙でカレンダー作り2」

講師 喜多方染織グループれんが代表

日時 一月二二日(土)午後一時半～三時

「近くで楽しむ博物館収蔵品ガイド7」

―阿弥陀来迎図と法華経―

講師 学芸員 川延安直 小林めぐみ

日時 一月二五日(金)午後一時半～三時

◎自然史講座

※「鶴ヶ城の野鳥」

講師 会津養護学校教諭 古川裕司さん

日時 一月一九日(日)午後二時～三時半

◎体験講座

※「わらぼうしをつくる」

講師 伝統技術保持者 鈴木幸雄さん

日時 一月一日(土) 午前二時～午後三時

※「おもちゃをつくる」

―すりこぎトンボをつくる―

講師 展示解説員 國府由美子ほか

日時 一月一八日(土)午後一時半～三時半

実演

場所 体験学習室

※「唐人風づくり」

講師 伝統技術保持者 鈴木英夫さん

日時 一月一五日(日)午後一時半～三時

※「三島の編組細工」

講師 伝統技術保持者 五十嵐三美さん

日時 一月二九日(日)午後一時半～三時

※「中ノ沢のこけしづくり」

講師 伝統技術保持者 瀬谷幸次さん

日時 一月三日(金)祝午後一時半～三時

※「注連縄づくり」

講師 伝統技術保持者 鈴木幸雄さん

日時 一月一七日(日)午後一時半～三時

木曜の広場

場所 講堂 入場無料

博物館再発見

◎第六回「戦争と人々のくらし」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 関口 功

日時 一月五日(土)午後一時半～三時

*第六回は都合により九月二〇日から変更になりました。

◎第七回「城下のくらし」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 阿部綾子

日時 一月一九日(木)午後一時半～三時

◎第八回「板碑について」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 高橋 充

日時 一月一六日(木)午後一時半～三時

◎第九回「恵日寺絵巻を読む」

講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 木田 浩

日時 一月二二日(木)午後一時半～三時

はくぶつかんで遊ぼう!

場所 体験学習室

「おもしろ実験室☆氷の結晶をつくる」

日時 一月八日(日)

「クリスマスカードをつくる」

日時 一月一〇日(日)

午前九時半～午後四時半

*展示解説員がご案内いたします。

*時間内随時受付 所要時間二〇分程度

やさしい展示解説会

*展示解説員による常設展の案内です。

*毎週土曜日、日曜日の午前十一時と午後二時から三〇分程度行います。

*なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

*その他、行事等の詳細につきましては、月行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

一月三日(金)・祝文化の日

企画展無料開放日

一月一日(水)～一月五日(日)

*ふくしま教育週間により、小・中学生、高校生は企画展を無料でご覧いただけます。

一〇～二月の休館日

一月 一六日(月)

二月 六日(月)・三日(月)・二〇日(月)

二四日(金)・二七日(月)

三月 四日(月)・二一日(月)・一八日(月)

二五日(月)

年末年始 一月二八日(木)～一月四日(木)